

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 20 日現在

機関番号：32640

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2015

課題番号：25580048

研究課題名(和文) 視覚障害者を含めたすべての人に開かれた作品の構築

研究課題名(英文) Creation of Art Appreciable by All Including the Visually Impaired

研究代表者

海老塚 耕一 (EBIZUKA, Koichi)

多摩美術大学・美術学部・教授

研究者番号：60407822

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は芸術作品の鑑賞において、様々な障害を持った人々が健常者との差異により、本来楽しめるべき芸術鑑賞が、楽しむべく機会もそれほど多くないといった状況に置かれているという悲しい状況から、芸術を楽しむべく場とその鑑賞をどのように構築するかといった問題に取り組んだ。

今回の大きなテーマは、「すべての人に開かれた美術・芸術作品」のあり方を探り、明らかにし、その上で障害を持った人々、そして健常者も含めたすべての人に向かって開かれた、作品を制作し、提供していくことであった。

研究成果の概要(英文)：This study focuses on the appreciation of works of art by persons with various disabilities, addressing the issue of venues and modes for art appreciation by these individuals in light of the disheartening status quo, which is that there are few opportunities for them to appreciate art due to their differences from persons without disabilities.

The major theme of this study is “visual art and other arts that are open to enjoyment by all,” a theme that is explored and clarified before turning to the actual creation and presentation of works of art that can be appreciated by persons with disabilities as well as by everyone else.

研究分野：美術

キーワード：触れる 鑑賞 フロッタージュ 素材としての木

1. 研究開始当初の背景

展覧会において、日常的に眼にする原初的な決まりであるが、なかなか崩すことができない光景、それは、まず展示作品には手を触れることができないという不文律である。少しでも作品に近づこうものならば、すぐに監視員が近づいてきて注意される。作品に触れることなど、鑑賞者には許されない行為なのである。視覚障害者が美術を鑑賞することはそのような状況では、おおきなハンディを持つことになる。つまり感じる術がないのである。もちろん美術品は大切にしなければならぬことは承知をしている。しかし、それでは晴眼者以外の人と作品と出会うことはどのように可能なのだろうか。果たして、藝術の理解をそのようなかたちで進めてよいのか。研究代表者は、美術が晴眼者のみの理解で受容されてきている状況を反省し、すべての人々に開かれた美術作品のあり方を広めることが早急に必要と考えた。この点を注視することから本研究は始まった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、あらゆる人に開かれた美術・藝術作品のあり方を調査・研究し、その上で作品の提案を行うことである。つまり障害者も晴眼者も等しくひとりの鑑賞者と認め、それら鑑賞者が等しく鑑賞可能な作品を実体として現すことである。

これまで美的対象・美術は多くの場合、盲目的にただ晴眼者に提供されてきた。障害者に対して配慮がなされていたとしても、それは表面的なものであり、つねに美術・藝術の理解は健常者のものであり、それを正しいものとして、障害者に提供してきている。視覚から与えられる情報が現代においては、まず、第一情報としてあり、というより多くの場合そこで解釈され、理論化され、あるいは批評され理解されてきた。その領域をすべての人に広げるための研究と制作を本研究で行った。

「美術と」は本来すべての人に開かれているものと考え、そこでは美術館の設計は言うまでもなく、展示方法、解説、画集・評論研究などの書物、そして作品そのもののあり方に至るまでどのような人に対しても開かれる必要があるだろう。もちろん晴眼者と障害者では理解する上で方法も違い、あるいは理解に差異があるだろう。しかし晴眼者のものの見方・考え方を正解として、それを伝えるだけでよいとは思えない。相互間の交通が可能となったとき、美術はこれまでとは異なった領域へ歩みを進めることが可能となる。

五感を屈指することを現代人のなかでも晴眼者は忘れて、視覚に頼りすぎている。そもそも美的対象・美術は視覚だけに頼って良いものなのだろうかという疑問がある。「目で触れる」という言葉が示すように、「触れる」ということをキーワードに本研究を進め

ていった。

感覚することには、触覚、視覚、聴覚、味覚、嗅覚、のいわゆる五感と、その加え、温度感覚、生命感覚、運動感覚、平衡感覚がある。これらの幾つかの知覚を組み合わせることにより、すべてに人に開かれた美的対象・作品の構築への研究を行った。

まず、ものとしての芸術作品を含めて、知覚対象としてのものは、すべてこれを、美的態度を持って把捉し、内面的に構成する鑑賞者の主体的活動を待つ初め真の美的対象となる。その上で構成される美的対象は美的知覚以上の作用である美的体験の志向的な対象としてのみ存在する。このことは美的体験が美的対象に志向する体験であることと同様である。この主客の交互関係は両者の交渉を遙かに超越した層に属している。

また、美的対象・作品はもとより創作者の人格的な創造活動の所産であることは確かである。しかし美的対象・作品としてはそれを内面的に追想作する鑑賞者によって再生産されなければならない。すべての美的対象・作品は通常知覚対象が意識と相関的であるのと言うより以上の意味において主観的な存在性格を有し、美的主体の意識において外在的にはなくなると、これに内在する。

これらを思索し、理解した上で新しい原理のための考察とともに、以下の(1)～(6)を旨とした。

(1) 視覚を中心として鑑賞され研究されてきた美術から脱却し、「触れる」ことから始まる感覚を中心とした美的対象の鑑賞方法の探求。

(2) 健常者だけでなく、すべての人に開かれた作品の研究と構築。

(3) 視覚中心の鑑賞ではなく、おもに「触れること」を中心とした視点により、障害者も含めたすべての人に追想作を可能にする作品の構築と制作。

(4) 美術における「触れる」ことから始まる鑑賞の歴史を調査し、私たちの感覚をもととした鑑賞のあり方を認識し、明らかにしていく。

(5) 身体を総動員することで美的対象・作品を鑑賞する方法と、作品の構築と表出。

(6) 以上の研究により美術の新たな地平を獲得し構築。

3. 研究の方法

(1)海外における触察本の現状把握

ヨーロッパにおける触察本の現状を把握するとともに、触察本を収集し分析・研究を始め、従作品としての触察本(アーティストブック)の可能性を探る。また、開かれた(従来の触察本と常者のためだけでなく、視覚障害者の含めた人々の)作品の制作のために、有効な素材の研究と制作方法の探求を行う。絵画・彫刻・版画等における素材の考察を行い、いくつかの作品を制作し、「触れることのできる作品」として、展覧会で発表し、その有効性を確かめていった。

(2)制作と鑑賞の授業の実践 こどもの体験の重要性の把握

鑑賞の一環として、盲学校の児童や盲目の人々とともに制作を実践し、自らが表現した作品をみんなで鑑賞するワークショップを幾度か行い、教育における図画・工作、そして美術の愉のすべての人に等しく有効であることを示していった。

(3)作品に使用する素材に関する研究

作品に使用する素材に関する研究を進める。ここにおいては多くの学生・大学院生の協力を得て、作品の提供等もしてもらい、多面的な形のなかでの作品と素材の関係を確かめていく。表現における素材の意味を考えることは、今日の美術・芸術にとって重要なことである。現代の美術作品において、すべての素材を並置することの意味はすでに示されている。本研究においては、いい素材とか悪い素材といった思考法をぬぐい去ることが必要となる。**たとえば**、数種類の木を同じ方法で加工し作品を制作する。あるいはいくつかの金属・プラスチック等の素材を堂一のデッサン、設計図をもとに、同じ方法で加工し作品を制作する。そのような形で制作した作品に現れる素材の違いによって表出した差異をここでは研究し探り、認識していく。素材の違いにより生じる当たり前の感覚を感知し、認識することにより、作品の表現力の相違を感受することから制作した作品の提示は、鑑賞者においては触れることにより生じる小さな事件・驚きの数々によって、理解することへのこのことの大きな可能性を開いていった。

4. 研究成果

(1)研究成果展

試作を通して実体化していった作品は個展により発表することで、「すべての人に開かれた作品」の鑑賞の「場」の構築を試みることにした。まず、横須賀美術館での個展「境界へ、水と風から」(2014年9月27日から12月14日)では、2013年に開催したカスヤの森現代美術館での個展「水辺に佇み、風に触れる」(2013年11月1日から12月22日)と同様に木を主体とした作品を展示。開催期間の全日、すべての人が自由に作品に触れて鑑賞ができるような展覧会を構築することが可能となった。多数の未就学児や幼稚園・保育園の子供たち、小学生や中高生、そして一般の方々、さらにさまざまな障害を持った方々に作品に触れたいただくことにより、作品を「観る」ということが鑑賞のあり方として、有効な手段であることが確信される状況が、日々生まれていた。また横須賀美術館でのワークショップ(11月29日)「フロッターージュで探る美術作品のありか」では、最初20名ほどの参加者で行っていたのだが、最終的には美術館を訪れた多くの人に参加していただき、70名以上の方が直に作品に触れ、作品の言葉を聴き取るために、作品に触れ自由にフロッターージュを行っていた。

さらに、横浜の小さなギャラリーfu(2015年3月10日から15日)における個展「触れるから」では、鑑賞者が参加することにより作品そのものが成立する作品を考えた。彫り傷をつけ、彩色されたタレリーフの木の板を、子供から大人までのワークショップに参加した十数人の方々がそれぞれのとらえ方、感じ方で、擦り描き出す素材-鉛筆やクレヨンクレヨン、クレパス、木炭等を選択し、フロッターージュする。そのタレリーフ上の板とフロッターージュされた紙とを交互に置き、広がりを作り、展示する作品である。視覚障害者の小学生も同じように参加し、作品に触れフロッターージュしていた。この時間の生き生きとした、楽しさに溢れた時間と空間は、今後の研究の方向を見定める良い機会となった。

二つの展覧会によって新たな鑑賞のプログラムの構築に向けてのヒントを得ることとなった。ギャラリーQの個展「水に宿る影」(2015年9月21日から10月3日)では、普段通りの展示をし、会場に「触れて鑑賞する」ことを促す表示をすることで、ただ立ち寄った方々に触れることで見えてくるものの素敵を、そこで浮き上がってきた事件を感覚し、受けとめていただくことを試みた。

また、第60回CWAJ現代版画展の企画で毎年行っているハンズ・オン・アート-視覚障害者のためのフロッターージュ・ワークショップ(2015年10月30日から11月1日、東京アメリカンクラブ)では、さきのギャラリーfuにおける作品を設置し、多くの視覚障害者の方々、そして晴眼者の方々と作品制作と同時に鑑賞することを愉しんだ。主催者側のワ

ークショップの目的は、「視覚障害者や晴眼者がクレパス、鉛筆などを使用して紙を擦ることにより、視覚障害者や晴眼者自身が色を選び、描くことで芸術を楽しむ参加型芸術体験が得られる」というものであり、このように作品が積極的に消費されていくさまを見るのはひとつの喜びである。また事後報告として「等間隔の6本のフロッタージュ木材の間に出来上がった作品を並べると、全体で木材12本分の大きな絵画作品が出来る。また出来上がった作品が時間、人ごとに変わるので、変動型芸術作品が出来上がる。出来上がった作品は一人ではなくて、複数の手によるものだから、共同制作作品が出来上がる」と。さらにまとめとして、「フロッタージュ・ワークショップにおいて、参加型、変動型、共同作品作成が行われ、多数の視覚障害者や子供を含む来場者がアート制作を楽しめた。美術の鑑賞や制作を諦めていた視覚障害者が、久しぶりのアート制作に大変喜ばれて、多くの感想を寄せられた。フロッタージュ・ワークショップは会期中、大盛況で、100名を超す来場者で賑わった」と伝えられている。

(2)ひらめき ときめきサイエンスの実施

平成27年度ひらめき ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI(研究成果の社会還元・普及事業)「あそびじゅつ「手のひらに入る大切なかたち」 五感と時間・空間感覚を使って美術体験」にて、本研究の成果を小中学生に体験してもらった。このプログラムでは、科研費による研究の知見を踏まえ、見ることを主体としてもものと接するのではなく、触れることにより、ものの在り方とその抵抗の力を探り出し、五感・時間・空間感覚を土台として感受する作業の面白さを伝えることに重点を置いた。具体的には、受講生に種類が異なる木材を用意し、素材を五感で味わいながら、紙やすりを使って自分の手に馴染む形に変化させ、その過程で受講生が言語化し、他者と共有し、共に施行することによって、発見、気づき、他者との感じ方・捉え方を認識できるよう設定した。プログラムは平成27年8月24日(多摩美術大学八王子キャンパス)平成28年1月17日(多摩美術大学美術館)の2回開催し、両日併せて72名の参加があった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

海老塚 耕一、「すべての人に開かれた作品」を志向し、「装置」としての美術作品を構築、多摩美術大学研究紀要、30号、63-69、2016年、査読有り

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

海老塚 耕一 他2名、平成27年度ひらめき ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI(研究成果の社会還元・普及事業)、あそびじゅつ「手のひらに入る大切なかたち」 五感と時間・空間感覚を使って美術体験(整理番号：HT27094)平成27年8月24日：多摩美術大学八王子キャンパス(東京都)平成28年1月17日：多摩美術大学美術館(東京都)

6. 研究組織

(1)研究代表者

海老塚 耕一(EBIZUKA, Koichi)
多摩美術大学・美術学部・教授
研究者番号：60407822